

第 10 回 日本読書療法学会勉強会  
「読書科の取り組み」  
日本読書療法学会会長 寺田 真理子  
2013 年 7 月 28 日（日）

この講義録に登場する書籍の詳細をご覧になりたい方は、ブログのほうにリンクとともにご紹介しておりますので、下記の URL をご参照くださいませ。

<http://ameblo.jp/teradamariko/entry-11594364953.html>

今回は「読書科の取り組み」というテーマで開催します。きっかけになったのは、今年の 2 月 22 日の日本経済新聞の記事で、読書科が紹介された記事を目にしたことです。興味深い活動が紹介されていて、ぜひ実際に詳しくお話を伺いたいと思って企画させていただきました。読書療法が成立するためには、読書に慣れ親しんでいないと難しい部分がありますが、読書に親しむという意味で参考になるお話が色々と伺えることと思います。読書科の立ち上げからのご担当者である、江戸川区教育委員会の浜田真二先生をお招きしています。浜田先生のプロフィールをご紹介します。

東京都公立中学校教諭を 18 年間務められた後、小金井市教育委員会の指導主事として 6 年間務められました。東京都公立小学校副校長を 1 年間務められた後、平成 24 年度江戸川区教育委員会の統括指導主事となります。江戸川区の読書科が平成 24 年度からスタートし、当初から担当者として関わっていらっしゃいます。

まずは前半で浜田先生に読書科の取り組みについて映像などを交えてご紹介いただき、後半ではみなさまから事前にいただいたご質問を中心に対談形式で伺っていききたいと思います。それでは、浜田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

（以下、浜田先生のご講演です。）

よろしくお願いします。江戸川区教育委員会というところについて、まずご説明します。役所の中に教育委員会事務局があって学校の施設を建てたり、転出や転入の手続きを行ったりしています。指導室というところに私はいるのですが、ここの人たちは役所の人とは少し違う立場なんですね。私のプロフィールを見ていただければわかるように、教員をやっている者を何人が引っ張ってきてそこに置いて、役所と学校現場をつなぐ役割を持たせているのです。指導主事の私は役所にはいるのですが、また現場に戻ったりもします。以前に小金井市で指導主事をした後、副校長として現場に戻ったのですが、1 年間のみで、また指導主事になっています。その年度から読書科が始まるからということで任されたわけですが、これは準備のほうが大変だったと思います。私はいいところだけポンともらったような感じなのですが、そのような立場ということでご理解ください。教育委員会事務局の教員がやっていると。現実には、読書科担当といっても、教育委員会では色々とやること

がありまして、江戸川区には小中学校が 106 校あるんですけれども、それを 5 人の指導主事で回しています。体罰やいじめなど色々な問題がある中で、江戸川区としては読書科を進めていっています。「あの先生の教え方はどうなんだ」といった区民からの苦情の電話にも対応しなければいけません。それから、東京では初任の若い先生がどんどん増えているのですが、去年は 200 人ほど、今年も 120~130 人くらい採りました。初任の先生が特に小学校で増えています。教員の採り方がちょっとまずくて、最初にたくさん採った年があったんです。その後は余っているからとずっと教員を減らしていた時代があったのですが、その方たちが定年で退職になってきたので足りなくなったといってまた大量に採っているという状況なんです。なので今の東京の小学校は若い先生かベテランの先生かという二極化が起きています。そんな中で江戸川区教育委員会では読書科を特色として打ち出し、新聞でも取り上げられていますように、色々なところでご紹介いただいております。今日は日本読書療法学会勉強会ということで、お招きありがとうございます。私の今の立場で、学校現場でこういうことをやっているんだ、子供たちの読書状況はこうなっているんだというところをお話させていただいて、モデル校である先進校の様子もご紹介できればと思っております。

三本立てで、まずは国としての考え方や全体の状況、そして江戸川区ではどうなっているのか、さらに具体的にモデル校ではどういうことをやっているのかをお話していきます。

まずは大きなところから子供たちの読書状況ということで、文科省が国民の読書状況に関する協力者会議の報告書を 23 年 9 月に出したんですけれども、この中でいいことを言っています。読書の素晴らしさを端的に表しているんじゃないかと思います。「読書は、思考力、判断力、表現力、コミュニケーション力などをはぐくみ、個人が自立して、かつ、他者との関わりを築きながら豊かな人生を生きる基盤を形成するもの」。更に、「東日本大震災を経験した我が国が、危機的な状況から立ち上がり、もう一度未来を創造する力を養うため、一人一人に、また、社会全体に今こそ読書が必要」だということです。読書に対して国から大きなバックアップの風が吹いている状況だと思います。もちろん、これ以前にも読書の大切さは説かれてきましたが、この端的な文章は素晴らしいなと思いました。

ここで現状を見ていくために、全国学校図書館協議会のアンケート結果を見ていきましょう。1982 年から毎月 5 月に 1 ヶ月の読書量を調査したものがあります。毎日新聞社が行っているものです。2012 年度の小学生の平均は月に 10.5 冊。2000 年度までは 10 冊を超えることはなかったのですが、年々上がってきています。決して下がってはいないことをデータが示しています。一方、中学生はというと、上がってきたとはいえ 4.2 冊。高校生は 1.6 冊です。どうしてこんなに違うのかと思われるでしょうが、小学生のころは、子供のしつけということが重視されますし、ゲームばかりしていると怒られたりして「本でも読みなさい」ということで保たれている部分があると思うんです。ところが中学生になると朝練があり、昼練があり、放課後も部活があり、塾もあり、土日もある試合だなんだと本当に忙しいんですね。そういうことで差が出てきますが、私の考えでは、小学校時代にある程度読書習慣をつけて、読書が楽しいという経験をしていれば、中学生になって忙しくても、ある程度余裕が出てくれば、読書の楽しさが身についていますのでまた読書をするように

なるでしょう。だからまずは小学校でしっかり、と考えています。

不読率、つまり1冊も読んでいない人のデータも取っています。下がっていたのですが、最近また上がってきてしまいました。2012年度の不読率は高校生は53.2%。高校生の半分くらいは1冊も読んでいないんです。スマホや携帯に時間をとられているのではと思います。中学生は16.4%、小学生は4.5%です。ただ、ここ数年の大きな傾向としてみれば不読率は下がっているといえるでしょう。

学校でつきたい力としては、学力、心の豊かさ、体力、昔でいうところの「知・徳・体」です。これらをバランスよく育てていくことが大きな目標になっているのですが、読書と学力の関係を示すデータがあります。全国学力学習度調査の国語の問題での正答率を、「読書が好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえば好きではない」「好きではない」という層に分けて見てみると、正答率の高さと読書に相関関係が見られます。これは国語だけでなく、中学校の数学のデータでも、読書好きな子の正答率のほうが高いというデータが得られています。国立教育政策研究所という文科省の研究機関では、家族の読み聞かせと読解力に関する調査をしていて、読み聞かせ体験のよくあった小学生、中学生ほど、読解力は高いという結果が出ています。読書の質を高めるためにということで、読解力と読書後の行動を調査したデータもあります。読書後に作文を書けという嫌がられるのですが、たとえば紹介文を書くとか、その面白さを友達に伝えとか、色々な体験をさせると、そういう体験を多岐にわたってしたほうが読解力が高いことが示されています。読むだけではなく、その後にそれに関する行動をとることが大切だとわかってきています。

それでは江戸川区の子達の読書状況はどうなんだろうということで数年前からデータを取り始めたのですが、はっきり言ってまだいい状況を示すデータは出ていないですね。23年度から読書科の導入に備えて朝読書などの活動を徐々に始めて、これは24年度のデータですが、「家や図書館で、普段（月～金曜日）1日当たりどれくらいの時間読書をしますか」というアンケートで、江戸川区は全国平均より多少いいくらいです。以前は同じくらい下くらいでしたので、良くなっています。「昼休みや放課後、学校が休みの日に、学校図書館・室や地域の図書館へどれくらい行きますか」というアンケートも、頻繁に行く子は全国平均に比べて意外と少ないです。学校図書館の整備など、環境面で弱いところがあるかなと認識しています。ところが、「読書は好きですか」というアンケートの結果を見ていただくと、江戸川区は「はい」と答えた子が全国平均よりも多いのです。「どちらかといえば好き」という子を含めたデータも、全国平均を上回っています。経緯を見ていただくと、どちらかといえば好きという子も含めて、小学校では平成19年度は70.1%、平成21年度は70.7%という数字だったのが、平成24年度は74.4%に上がっていて5年間で4.3ポイントもアップ、中学校のほうも5年間で7.9ポイントもアップしています。ですから、これからご紹介していく取り組みをしていく中で子供たちに読書好きが増えたということは客観的に言えると思います。

ここまで国レベルの話や現状を見てきましたが、これを踏まえて江戸川区ではどんなことをやってきたのかをお話していきたいと思います。江戸川区では読書科をいきなり始めたのではなく、その前に区を挙げての江戸川区読書改革プロジェクトというものがありま

した。読書好きな区長さんの要請を受けて、子供たちの読書意欲を高め、地域と共に読書の推進につながる機会の提供や環境整備をしていこうということで平成 21 年度に立ち上がりました。活動内容としては、「私のすすめるこの一冊」を区民から募集してホームページで紹介したり、春と秋の読書週間を区で設けて学校だけでなく色々な場所でポスターを掲示したり、読み聞かせボランティアの方々に研修をしたり。それから、これは読書科とタイアップしたのですが、学校で作った作品を集めて読書改革プロジェクト展を開催しました。区内書店と連携してポスター掲示をしてもらったり、書店員さんと呼んで POP 作りなどの出前授業をやってもらったり、ブックフェアを開催したりしました。こうしてまずは地域で盛り上げた上で小中学校でもっとできることはないかということで、平成 24 年度より文部科学省教育課程特例校指定で区内の全小中学校に「読書科」を設置することになりました。

江戸川区読書科の目的ですが、学力向上を目的にするのは違うと思い、「本好きな子供を育てる、本で学ぶ子供を育てる」ということを目的にしました。ただ、本好きなだけでいいのかということになるので、学校教育の中でやる以上、「読書を通じて、生きていくために必要な様々な知識・能力を身に付ける」ということを目標に据えました。では、ただ本を読めばいいのかというと、全国のほとんどの小中学校で朝読書をやっていますが、ページが進んでいない子、しょっちゅう本を取り替える子、ただ座っているだけの子などがいて、本当に読書を楽しんでいるんだろうかという疑問があります。そこで読書科のテーマとして「目的をもった読書時間」「豊かな読書、広がる読書」「交流する読書、深める読書」「自由な意見や発想を尊重する読書」を掲げ、読書を通じてもっと色々なことをやってみよう、それによって力がつくんじゃないかと考えて読書科を設置したんです。

小中学校では夏休みや冬休みなどを除いて 35 週間を 1 年間として数えますので、合計 35 時間、週 1 時間くらいを読書科の時間とします。いきなりこれを導入するのは大変なので、平成 24 年度は 25 時間、25 年度は 30 時間、26 年度で 35 時間と、段階的に引き上げていきます。現在は 30 時間ですが、読書に親しむ時間として従来の朝読書の時間も含め、それにプラスして読書から学ぶ時間（1 時間単位の読書活動）で、無理なくやっていこうとしています。教育課程の編成を見てみると、国語、社会、算数、理科……と 1 年間にどれだけの時間を充てなくてはいけないかが国によって決められているのですが、特例校では新設教科等の授業時数として 30 時間を読書科に充て、代わりに総合的な学習の時間の授業時数を減らすことが認められています。世田谷では日本語科、杉並ではよのなか科があるように、特例校で区の特徴を打ち出すようになっています。江戸川区ではこうして読書科が認められました。朝読書が 6~7 割ですので 20~25 時間、読書活動が 3~4 割で 10~15 時間となっています。朝読書の 15 分の時間を 3 回やれば、授業は 45 分ですのでこれで 1 時間とカウントできるようになっています。ですから無理なくできるんです。

評価方法については、当初から問題になりました。教科でやる以上、1~5 までで評価をつけなければいけないと考える人もいました。ですが、たとえば生活科などは「こういう活動をしました。こういう取り組みをして、こういうところが伸びました」と言葉で表現することができるんです。読書科でも、子供たちの活動状況を文章で表現するようにして



います。ただ、1~5 までの評価をしなくてはという意見もやはりあるので、今後どうしていくか議論を続けているところです。

それでは、ここでモデル校の取り組みを紹介したいと思います。江戸川区では小学校が 73 校、中学校が 33 校あるので、一斉にやるのは難しいため、モデル校として我々も入って「こういうことをやっていくんですよ」と説明しながら進めてきました。平成 22・23 年度は平井西小学校、平成 23・24 年度は小松川小学校で、この小松川小学校が新聞でも取り上げられたものです。ここで小松川小学校の取り組みを映像でご紹介します。

( 映像は非公開となりますので、ご了承ください。子供たちによる学校図書館の紹介、情報コーナーでの調べ物の様子、先生による本の紹介コーナー、朝読書の様子、読み聞かせの様子やボランティアの方へのインタビューなどです。)

平成 23・24 年度研究奨励校である小松川小学校の取り組みをご覧いただきました。研究発表をして区内のすべての学校の先生方に見ていただいて、読書科の取り組みを自分たちの学校でもできることから進めていきたいと思います。一斉にこうやりなさいというのではなく、色々な提案をしながら自分たちの学校に合ったものを見つけていってもらい、モデル校の取り組みの中でも取り入れられそうなものを取り入れていってもらう、そんなやり方で広めています。

モデル校の研究ということで小松川小学校のことをもう少しお話すると、子供たちの実態として「読書離れの傾向にある」「調べ学習にインターネットを多用している」「いつも同じような本を読んでいる」ということがありました。これに対して先生方の願いとして「読書習慣を身に付けてほしい」「色々な本を読んでほしい」「学習にもっと本を活用してほしい」「友達同士で本を話題にしてほしい」というのがありました。こういう思いがあることが研究にあたって大切になってきます。小松川小学校では、本好きというだけでなく、伝え合うということを重視して「本好きな子供 本で学ぶ子供 読書の喜びを伝え合う子供」というのを研究主題に読書科を新設しました。育てたい力としては「読書習慣」「本の活用力」「選書力(自分で読みたい本を選んでくる力)」「伝え合い読書の幅を広げる力」がありました。「読書科を通し、子供たちが読書習慣を身に付け、読書の幅を広げ本から学んだり本を介した交流をしたりする力を身に付けていく」ことをねらいにしました。

小松川小学校では、朝ではなく昼間の読書をやっていましたが、それも OK です。朝読書をしようといっても、すでに朝に音楽や体育の集会などをやっているところもあるので、そこに朝読書を入れようとしても難しいんですね。習慣づけることが目的なので、どこかの時間にきちんと入れましょうということです。

読書の時間を「学校図書館利活用指導」「本の世界を広げる活動」「本で学ぶ活動」の 3 つに分け、これらを「伝え合う活動」がつなぎます。「学校図書館利活用指導」では、学校図書館の利用のきまりはもちろんのこと、日本十進分類法や図書を活用した調べ学習の仕方を指導します。「本の世界を広げる活動」では読書の意欲・関心を高める活動や読書の幅を広げる活動ということで POP 作りや帯作り、紹介文の作成をしています。「本で学ぶ活動」では調べ学習スキルを活用し、本を通して課題を解決する活動や人の生き方など、本を通して学ぶ活動をしています。「伝え合う活動」では友達同士による本の紹介や

読み聞かせ、本の感想や学んだことを伝え合う活動をしています。

環境ですが、学校図書館は一般的なものです。地方の学校などですごく立派な設備のところがありますが、小松川小学校はそういう特別な設備があるわけではなく、一般的な学校図書館だと思います。それよりも読書コーナーですね。廊下に面した教室と教室の間のスペースに守衛さんが作ってくれたもので、ここを読書コーナーとして使っています。それから情報コーナーも作りました。決して江戸川区のほうからまとまったお金を渡して「こういうことをやって」というのではなく、学校側の工夫でこういうことができたんです。近所の畳屋さんの協力で畳のベンチを作ったり、守衛さんがブックスタンドを手作りしたり。それからバッグがあります。「こまっこブックバッグ」といって生徒の親御さんがデザインされたそうですが、ここに読む本と先生方のお薦め本リスト、読書カードが入ります。そして「読み聞かせたい」というお母さんたちのボランティアが毎週金曜日の朝に全クラスで読み聞かせをしてくれます。学校応援団という大きな組織があって、その中に「読み聞かせたい」があります。学校応援団というのは江戸川区の特色なのですが、地域の方に学校応援団に登録してもらって自分のできることで協力いただいています。学校農園を手伝ってくれるお父さんがいたり、色々な形で学校に関わってもらっています。

読書月間もやっていて、「読書バイキング」「ブックトーク」「異学年の読み聞かせ交流」「図書委員会による本の紹介や読み聞かせ」「こどもまつり『お話の世界』」などのイベントを開催したほか、読書量の目標を達成したら、お気に入りの本の題名をカードに記入して紹介するというのもやっています。

成果としては、本で学ぼうとする子供が増えてきました。それから、読書習慣が身についてきました。読書に対して好きだという肯定的な反応をする子供が増えています。私の見た授業の中で、自分の読書傾向を知ろうということで、普段どんな分野の本を読んでいるかを考えて、あえてそれと違う分野の本を図書室で選んで読もうという授業がありました。そういうふうに色々な分野の本を読んでもらう工夫の結果、様々な分野の本に親しみ読書の幅が広がってきたようです。それから、友達の紹介する本に興味を持つようになってきました。紹介するというのも、大事な勉強のひとつですね。実は、今東京都が目しているビブリオバトルというのがあって、それをこの学校でもやったんです。自分のお気に入りの本を班でひとりずつ紹介して行って、その中からいちばん読みたい「チャンプ本」を選んでもらいます。そして班代表の紹介をクラスで聞いてクラスの「チャンプ本」を選びます。今度はそれを学年で投票してチャンプ本を決める、という具合で面白かったですね。書評合戦というんでしょうか。猪瀬知事もこの取り組みを都立高校で実施しようとしていますね。いち早く小学校でもやってみたわけですが、かなり盛り上がって面白かったです。

先生方の変容も興味深かったです。本を話題にするようになりましたし、子供達の読書の実態を把握し、本を選ぶ手伝いや助言ができるようになりました。また、指導の工夫をするようになりました。新しい取り組みで見本がないので、教育委員会としても「こういうことができますよ」と紹介はするのですが、全国初ということで色々なところから「これは読書科に使えるな」と仕入れてきてやってくれました。

子供たちと保護者を含めた学校アンケートでは、読書科の取り組みについて「満足」「おおむね満足」を合わせると96%で、評価をいただいています。

成果の確認としては、子供達が着実な変容を見せたこと、教師の意識が変わり、本を活用するようになったこと、環境が整備できたことが挙げられます。課題としては、学校図書館等の更なる整備がまずあります。蔵書の中身や、貸し出しの工夫です。貸し出しがバーコード管理でしたら、読書傾向などもすぐに把握できるのですが、そのような対応になっていません。学校司書はおらず、先生方の中で司書免許を持った方が中心になってやっています。年間活動計画の見直しも課題のひとつです。色々な学校にそれぞれの考え方がありますので、より良いものにしていこう、と。内容は読書力の更なる向上と読書活動の継続研究です。もうひとつの課題は、読書科推進の組織づくりです。これまでは研究事業があったのでよかったのですが、それが終わった後のことを考えてもっと組織づくりをしっかりとっておかなければと思います。読書環境の維持、活動の推進役の確保を考えています。

以上、見ていただいたように江戸川区の子供たちは読書科の活動を通して元気に学習に取り組んでいます。この後またみなさんからご意見を伺って持ち帰り、より良いものにしていければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

寺田：浜田先生、ありがとうございます。素朴な疑問ですが、昼読書の時間が「こまっこタイム」と呼ばれていますが、「こまっこ」とは何ですか？

浜田：「小松川小学校」で、「こまっこ」になっているんです。ちなみに江戸川区には小松菜の名産がありますが、これも小松川から来ているのではと言われています。

寺田：そうなんですね。ありがとうございます。それではここから、事前にいただいた質問についてお尋ねしていきたいと思います。まずは読書科の導入による変化についてです。お話の最後で、読書の幅が広がったとか、友達の薦める本に興味を持つようになったということが挙げられていましたが、読書以外の日常生活の面で、たとえば注意力ですとか授業に対する態度に変化はあったのでしょうか。

浜田：中学校で朝読書をしてから授業に入ると、落ち着いて授業に入れるという評判を得ています。小学校でも、昼読書をすると、外で遊んで帰ってきて読書をして落ち着いてから午後の授業ということで、子供に落ち着きが見られます。本好きが増えたことは色々なデータで確認できましたが、学力が上がったかどうかまではまだ検証できていません。

寺田：落ち着いて授業が受けられるようになったとのことですが、その落ち着きはある程度持続するものなのでしょうか。たとえば朝読書をして1時間目は落ち着いているけれど次の授業になるともう騒がしくなってしまうとか……。どの程度効果が持続するのでしょうか。

浜田：子供の心理からすると、朝バタバタと出てきたのがいったん本を読んでクールダウンして本の世界に入って落ち着いて「さあ授業だ」って切り替えられれば、その後は落ち着くと考えられます。間に嫌なことがあったりすれば別ですが……。家で嫌なことがあって学校に来て、そのままだと友達とケンカをしたりしてずるずるといってしまうのですが、読書があると切り替えができるので、そうならずにすみますね。

寺田：ありがとうございます。切り替えの効果が大きいんですね。日本読書療学会としてはやはり療法的なことに興味があるのですが、読書によって療法効果が得られたような事例がもしあれば教えていただけますか。

浜田：授業中に教室にいらなくて飛び出してしまうような子がいます。ADHD の子だと思うんですが、モデル校でもそういう子がいて、校長室で預かることが多かったそうです。校長室に『100万回生きたねこ』などの本を何冊か置いておいたら、静かにそれを読んで、それから落ち着いて教室に戻っていったそうです。そういうことが何回もあったそうで、療法的というのかはわかりませんが、そんな事例がありました。

寺田：普段落ち着かなくて飛び出してしまうような子が本を読んで落ち着くということですが、ディスレクシア（読字障害）など、本が苦手な子もいるかと思います。そういう子が読書科の活動にうまく入れないというか、みんなが読んでいるけれど自分は読めないということがあったりしますか。

浜田：LD に該当するかと思いますが、特別支援教育が各学校で進められていて、そういう子には担任などから個別の指導、支援がなされます。特別支援学級という通級で週に1回通って自分の苦手な分野を指導してもらうものもあります。読むのにすごく時間がかかるとか、文字は苦手だけれど音からなら入りやすいとか、色々な子がいると思うのでその子に合わせた対応をしています。ただ限界があるので、たとえば電子辞書のようなもので読み上げ機能のついたものとか、文字が大きくなるものとかを導入しながら通級のほうはやっているという話を聞きますが、全部の学校でそれを導入するのは難しいので、個別に対応しているのが現状です。読書活動の中には黙々と本を読むだけでなく、読み聞かせをしたり発表をしたり何かを作ったり、色々な手立てを講じて読書好きな子を育てていくので、何かが取っ掛かりになればと考えています。

寺田：読み聞かせなど様々な角度からアプローチしていくということと、後は個別指導で対応されているということですね。ディスレクシアの場合に電子端末を使用したりするのは、全体ではなく個別対応になるのですね。

浜田：はい。



寺田：次に本選びについてお伺いしたいのですが、本を選ぶときの基準を教えてください。読書科にどの本を使うとか、先ほど、先生方がお薦めの本のリストを作っているというお話がありましたが、そういう本を選ぶときの基準はどのようなものなのでしょう。

浜田：これは現場の先生方に任せています。各学校でお薦めの本を選んだり、図書館担当の先生方が集まってお薦めの本を選んだり、書店が出しているお薦めの本を集めたりして、各学校の先生方の判断でやっています。先生が自分で授業で使うわけですから、使いやすいものを選んでもらおうと考えています。内容的に問題のあるものが選ばれるということは考えにくいのですが、もしそういうものが選ばれた場合は校長先生のほうでストップをかけると思うので、現場に任せています。逆に教育委員会のほうから「この本を使いなさい」と下ろされるのは現場の先生にとっては嫌かなと考えています。

寺田：では授業をやる先生が自分で「これはいい」と思ったものを選ばれて、それに校長先生がチェックをかける……ということは校長先生がかなりの読書家ということになりますか。

浜田：そうとは限らないのですが（笑）。人権や宗教、政治、偏った考え方など、そういうところで問題がないかを各学校で判断してもらうことになります。

寺田：良いと思って選んだ本だったけれど、思ったような効果がなかったとか、子供たちの反応が予想と違っていたということはあるですか。というのも、ある本で読んだのですが、女優の大竹しのぶさんが『スノーマン』の絵本をお子さんたちに読み聞かせをしたそうです。2人のお子さんのうち、上のお子さんはお話の最後にスノーマンが溶けてしまうことにすごくショックを受けてしまったそうです。ところが、下のお子さんは同じ場面で「わぁ～、溶けちゃった」と言って喜んでおしっこをしたという……（笑）。同じ本でも受け止め方が大きく違いますよね。なので、先生が良いと思ったけれど子供たちの反応が違ったということがあればお聞かせいただけますか。

浜田：だめだったという事例はこれまで見たことがないですね。むしろ、「あ、こんなに盛り上がるんだ」と、予想以上に反応があるほうが多いです。日ごろ子供たちに接している先生なので、何に興味を持っているとか、どう反応するかをある程度つかめているはずなので、そのあたりは先生方のセンスにかかってきますね。中には予想ほどうまくいかなかった事例もあるのでしょうが、その場合は先生方でその情報を共有して違う本を使うようにしていると思います。

寺田：先生方で情報交換をするということですね。本選びも、単に本についての知識があるということではなく、子供たちのことをどれだけ知っているかが問われるということ

ですね。

浜田：はい。

寺田：読書科についての新聞記事によれば、先生方の読書離れが進んでいて、本を選ぶ立場のはずの先生方が対応できないので、先生のための研修が行われているということですが、先生方の読書離れへの対応を詳しく教えていただけますか。

浜田：小学校の先生に関しては、読書離れは感じないのですが、中学校の先生に顕著ですね。中学校の先生方に読書科の話をすると、「まずは先生方の最近読んだ本や自分の好きな本の話をお子たちにしてください」とお伝えするんですが、「最近読んでないです」と言われてしまいます。「それなら、昔読んで好きだった本でもいいですから、お子たちに読んでもらいたい本を考えてみてください」ということで読書科をスタートしています。小学校の場合は、どの先生も読書科と関わりがあると思うんです。ところが中学校だと、国語の先生は読書が好きでしょうけれど、数学や社会、理科の先生となると、どう読書科と関わるのかという話になります。ですから中学校ではなかなか読書科を進めるのが難しい現状があります。

そこで研修なのですが、学校図書館司書の方から、読書科を主に進めていく司書免許を持った先生を対象に年 3 回、専門性の高い研修をしていただいています。それから、読書科でどんなことをやったらいいのか実感するための、専門的なものではない研修を年 3 回開催しています。これは自由に参加していただくもので、昨年度はたくさんの方にご参加いただき、「こんなことをやったらいい」という事例を色々ご紹介したので、段々と深まってきたという手ごたえを小学校では感じています。中学校では、まだちょっと、というところです。

寺田：後者の研修は事例紹介というか、実践をシェアして参考にしてもらうものですね。前者の、司書の方が行う専門性の高い研修の内容はどのようなものですか。

浜田：読書活動の効果などの専門的な話をしますね。分類法や図書館の活用の仕方、図書館での調べ学習の必要性など、色々な切り口での話です。地域の図書館と連携して、その図書館に行って研修をしたりしています。

寺田：江戸川区の中では学校司書は置かずにやっているということですが、今後読書科の取り組みを他のところでも実践していくに当たっては、司書の方がいたほうが進めやすいとお考えですか。

浜田：小金井市のときには、非常勤の司書の方が週 2 日来てくれていましたが、やはり図書室がきれいになりますね。分類もきちんとされて、色々な飾りもしてくれて……。先

生方の手助けになることは間違いないです。プロですので、どんな本を買ったらいいかのアドバイスもしてくれます。江戸川区としては、保護者・地域の方とともに先生が主体で図書室を運営させたいと考えています。

寺田：先ほど「読み聞かせたい」の映像がありましたが、お母さん方や区内の書店員さんたちなど、すごく地域の方を巻き込んで動いている印象を受けます。読書科の取り組みを進める際は、このように地域のモデルとしてやっていくのが進めやすいのでしょうか。

浜田：今は、先生方への要求が非常に多くて、あれもやってくれ、これもやってくれという感じなので、できるだけ色々な方が来て手伝っていただけると大変助かります。江戸川区には学校応援団があり、地域の方たちが、子供たちが放課後に校庭で遊ぶのを見守ってくれたり、宿題をやるのを見守ってくれたり、朝に読み聞かせをしてくれたり、色々な活動をしてきています。それを組織化しているのですが、これはどこでもできるものですし、必要な施策かと思います。「地域の中の学校」であるというのは、教育行政として考えているところです。

寺田：少し抽象的な質問になりますが、教科書の文章は読書科の観点からは是か非か、というご質問をいただいています。読書科では教科書の文章以外のものを使用されていると思いますが、読書科で扱うものと教科書の文章と、両者をどのように捉えていらっしゃるでしょうか。

浜田：教科書の文章が是か非かということについては、是と回答させていただきます。国語の教科書に関しては、狙いがきちんとあって学習指導要領に明記されていることを学ばせるために使用している文章ですので、色々なことを読み取れるようになっています。たとえば『ごんぎつね』などは私が子供のころから何十年も使われていますが、あの一つひとつの文章から色々なことが読み取れるのです。実は、最近の教科書では文章の後に同じ作者が書いた本の紹介などがたくさん掲載されています。教科書の文章から読書への広がりを持たせるようになっているのです。そういう意味では、今の教科書は大変いい工夫をしていると思います。

寺田：教科書だけで完結するのではなく、その後の読書に広げていくための起点になっているのですね。

浜田：はい。

寺田：これも難しい質問ですが、どのような読書が望ましいとお考えでしょうか。

浜田：ひとつの物語があったときに、授業ではどう思ったかなどを聞いて分析をしてい

くのですが、「このときどう思ったか」という質問になんとも感覚で答えてしまうのですが、それが文章のどこに書いてあるかという根拠をしっかりと示せるような文章になっているといいのかなと思います。そうは言っても色々な読み方がありますし、私は最近、『屋根裏の散歩者』など江戸川乱歩の初期のころの本を再読しているのですが、「こうあるべき」というきれいごとだけではなく、人間にはもっとドロドロした部分があって、そういうものに江戸川乱歩の本で触れることができているのだと思います。色々な読み方がありますから、望ましい読書は、読書科で何をやりたいかや、どういう子を育てたいかによって違うでしょうね。

寺田：ドロドロの部分は読書科では扱っていかないんですか（笑）。建前論としての国語の授業があって、「人間ってそれだけじゃないよね」というところを読書科で扱うというのはどうでしょうか（笑）。

浜田：江戸川乱歩の『芋虫』なんかは、人権のことで即カットされますね（笑）。ああいうものは扱えませんよね。だけど本音で話せるということは大事にしたいなあと思っていて、小学校高学年や中学校の道徳の授業とかだと、表面上はカッコいいことを言って終わりになってしまうということがあるんですけど、本当はそうじゃないよねっていう……。本音をしっかり出せるというのが楽しさでもあり深まりでもあるので、どう感じたかとかどう思ったかということは本音で語らせたいなと思います。

寺田：読書科のテーマとして、いじめとかそういうものも扱うのでしょうか。

浜田：読書科ではあくまでも本好きというところに主眼があるので、そういうテーマでは設定しないですね。それをやるとすれば道徳ですね。思いやりとかそういうものを身につけさせたいという狙いを持って、それに関連した文章などを持ってきて、どう思うかをみんなで話し合わせるという形で、道徳で扱います。

寺田：読書科で使った本を実際に挙げていただけるとイメージがしやすいのですが、いかがでしょう。

浜田：この間見た授業では新見南吉の『ごんぎつね』をやっていて、そのあと「じゃあ、この人の書いた他の本を読もう」ということで色々な本を借りてきて、「紹介文を作ろう」ということでPOP作りをしていましたね。そのPOPをつけた本を教室にずらっと並べて、お互いにPOPを見合って読みたくなった本を借りていくというようにやっていましたね。

寺田：わりと芋づる式というか、同じ作者の他の作品という感じで広がっていくのですね。

浜田：はい。



寺田：音読と黙読との関わりについて、ご質問をいただいています。情報化時代の音読と黙読の関わりということで、少し抽象的な質問になりますが、読み聞かせなど耳からの読書も色々を取り入れているというお話でしたので、音読と黙読の割合であったり、「こういう内容の本なら音読にしよう」といった基準になるようなものがあるのでしょうか。

浜田：発達段階によって割合が変わってくると思います。小学校低学年だと声を出して読ませる場面が多いです。音読のよさとして、古典などの独特のリズムがあると思いますが、口からも耳からも刺激があることで音読によって脳が活性化されて色々と感じるのにもいいですね。黙読はといえば、自分自身で考えながら読むので、心情をじっくり味わうときには「黙読でじっくり読みなさいよ」というようにシーンによって使い分けています。その時間に今日はどんなことをやるのかによって違います。一文一文読ませるやり方がありますが、あれはだめだと思います。範読といって先生が模範を示してあげると読みやすいのですが、一文ずつでは間違えちゃいけないということに気をとられて全然ストーリーがわからなかったり、自分の文だけが気になって周りを聞いていなかったりということになって、案外教育的効果はないのではと考えています。

寺田：成績評価に関して、評価方法を検討中というお話がありましたが、そもそも評価基準から切り離してしまうという考えはないのでしょうか。読書科を評価から切り離して、本が好きだとかそういう側面を育てることに集中するのは可能なのでしょうか。

浜田：当初、私共もそのように考えていましたが、やはり学校の教育活動である以上、狙いをしっかり持って評価をしなければいけないんじゃないかという考え方もありまして、どういう方法であれば楽しみながら取り組みもできて、先生方もねらいを達成できるかを考えているところですが、学校として読書科でこういう子を育てたいというのを最低限統一して持っていてほしいと思います。そのためにどこまで到達したかは見ていく必要があると思います。

寺田：評価基準のことをお尋ねしたのは、「アニメーション」というスペインの読書教育があるのですが、これは評価基準とは切り離して考えなければいけないとされているんですね。それもあって評価基準のことをお尋ねしたのですが、読書科の活動の中でアニメーションにあるものもいくつか見受けられましたが、活動を考える際にアニメーションを参照されたりしたのでしょうか。

浜田：アニメーションに関しても日本アニメーション協会の方からアドバイスをいただきました。私が見たものは、本を読んで、その本をしまわせたから麦藁帽子だとか靴、ひげといった登場人物の持ち物をもってきて「これは誰の持ち物でしょう？」というクイズ形式でやっていました。そのようにいくつか紹介はしていますが、まだまだ試行錯誤中です。

寺田：取り入れやすそうなもの、楽しそうなものから取り入れているところでしょうか。

浜田：そうですね。

寺田：みなさまの中にもアニメーションについて初めて聞いたという方も多いかと思うますので、ここで少し私のほうからアニメーションについてご説明したいと思います。

「アニメ」はラテン語で「魂」という意味なのですが、「アニメーション」には「魂に命を吹き込んで活気づける」という意味があります。もともと、アニメーションは社会文化的な運動として 1960 年代からフランスに存在しました。図書館や公民館といった施設を活用することでみんなの生活を上げていこうという運動です。そんな背景を受けて、読書についてのアニメーションがスペインを中心に起こってきます。1970 年代にはテレビの普及によって余暇の使い方が大きく変わり、テレビに割かれる時間が増える中で危機感が生まれていました。そこで、読書にもっと力を入れられないかということでスペインでモンセラ・サルトが「アニメーション」という教育メソッドを開発しました。これが体系化されたのが 1979 年のことです。

アニメーションの中に、作戦と呼ばれる 75 個の遊びがあるのですが、たとえば浜田先生が紹介してくださったように「これ誰のもの？」というお話の中の登場人物の持ち物を用意しておいて、それが誰の持ち物かを考えさせるものがあります。

「読みちがえた読み聞かせ」は、最初は正しく読み聞かせをして、次に読むときに「じゃあ、今から間違えて読むから、間違えたところを当ててね」といって、固有名詞や形容詞などを途中でわざと間違えて読むんです。そして間違えたところを子供たちに指摘してもらうというものです。

「これが私のつけた書名」は、本を読んでそれぞれに自分が考えたタイトルをつけてもらうものです。

「前かな、後ろかな？」は、たとえば 10 人いたら 10 箇所、本の中のシーンを抜き出してひとりずつ渡します。子供たちは並んでいるのですが、まず最初の子が自分の渡されたシーンを読みます。2 人目の子も自分の渡されたシーンを読んで、それが最初の子よりも前にあるのか後にあるのかを考えます。もし、前にあるはずのシーンだったら、そこで最初の子と場所を変えます。次に 3 番前の子が読んで自分の場所を考え、最終的にお話の流れに沿って全員が順番に並べるようにするというのが「前かな、後ろかな？」というものです。

「彼を弁護します」というのは、お話の中で登場人物が色々な行動をとるわけですが、それに対して、なぜその登場人物がそういう行動をとったのかを考えて説明し、弁護していくものです。

こういうものが 75 個あるわけですが、これが紹介されているのが『読書へのアニメーション-75 の作戦』という本です。アニメーションはスペインから始まって中南米などに広がっていったのですが、日本でもやっている方がいて、ネットで検索していただくと学校の

先生や NPO 団体などが見つかりますが、定期的に勉強会を開催したりもされているようです。そういう方たちが使っているテキストがこの本なのですが、すごくマニュアルっぽいです。「狙い」「参加者」「用意するもの」という具合に、料理のレシピ本のようになっています。実際にアニメーションをやろうという方が使われるにはいい本かと思うのですが、アニメーションを知らない方にとってはイメージがしづらいものですし、簡単に概要を知りたい方には『読書へのアニメーション入門 子どもの「読む力」を引き出す』がわかりやすいかと思います。

『フランスの公共図書館 60 のアニメーション』という本は、フランスでのアニメーションの取り組みを扱っています。スペインのアニメーションは読書教育の側面が強く、いかにして論理的な思考力や読解能力を育てるかに力を入れて指導しているのですが、フランスのアニメーションは文化事業という感じです。本の著者を招いてブックトークを開催したりして文化を華やかにしようという感じです。「睡蓮」のモネについて学ぼうということでモネの描いた作品をスライドで見せたり、モネの生い立ちと、年代によって作品がどう変わっていったかを話したり。シュールレアリズムについて学ぶというのもあります。対象年齢を見ると小学校の低学年だったりして、ずいぶん高度なことをやるんだなという印象を受けました。こちらの本のほうが、最初に何分間どんな話をして、次に音楽をかけて、それからどんなものを見せて、どんな問いかけをして、次に何を話すかといった具体的な構成方法がわかりやすく書かれています。実際に使われる本も紹介されていて、それらがすべて翻訳版が日本語で入手できるわけではありませんが、一つひとつのアニメーションをどう作っていくかを考える上ではすごく参考になる本かと思います。

もう一冊、読書についてということで『読書はパワー』をご紹介します。読書に関する論文をまとめた本です。230 本以上発表された論文の概要がこれを読むとわかるようになっているのですが、この中に書かれていたことで印象的だったのが自由読書の大切さです。指導的な「あなたはこの本を読みなさい」という読書ではなく、「あなたが自分の好きな本を読みなさい」という自由読書によってどれだけ読書能力が伸びていくかが強調されていました。もうひとつが、軽読書です。漫画やライトノベルといった軽読書は「そういうものは読書とは違う」といって切り捨てられがちなのですが、実はそれがもっと深い読書につながっていくための架け橋として重要な役割を果たしているということが強調されています。論文といっても、各ページの脇に 2~3 行のサマリーがついていて、そこを読むだけでも概要がつかめるようになっているので、そこだけ拾い読みしていけば 10 分もあればこの本に書かれていることがわかるような構成になっています。ひとつ残念なことに、本書の発行は 1996 年なので、テレビと比べて読書がどうかとかは述べられているのですが、ネットがまだ今のように普及していなかったため、ネット時代の読書については触れられていません。

アニメーション関連の書籍をご紹介したところで、もう一点お尋ねしたかったことを思い出したのですが、先ほど本を使っただけの調べ学習のお話がありましたよね。今の時代だと、ネットを使って調べ物をするに子供も慣れているので、教えないと本を使って調べ物をしないということでしたが、本を使って調べ物をするようになるとどのように代わって

いったのでしょうか。

浜田：インターネットで調べ物をする、キーワードを入れるだけでポンとすぐ出てきますよね。ところが本を使うとそのために色々関連するものを見たり、これを調べたいときは何を見ればいいのかなど、色々な知識がつくのかなと思います。小学生の携帯普及率が5割とか6割という時代ですが、本を使っただけの調べ学習のほうが、こっちに載っていなかったらあっちの本、という具合に広がりを持てると思います。読みやすさやレイアウトも考えられていますし。ただ、インターネットをあまり否定はしたくないなと思います。電子黒板なども普及させていきたいと考えていますし、インターネットもそれはそれとして考えています。

寺田：ネットを使うとすぐに何か出てくるけれども、あえてそうではない調べ方をすることで待つ力というのがついたりしませんか。

浜田：それは大いにありそうです。

寺田：ありがとうございます。そろそろお時間も終わりに近づいてきましたが、みなさまのほうから他に浜田先生へのご質問があればお願いいたします。

浜田：私からもお尋ねしたいことがあるのですが、ディスレクシアの関係の方がいらしているということなので、お話をお伺いできますか。

寺田：そうですね。第7回 日本読書療法学会勉強会のテーマが「読書療法の限界を考える～ディスレクシアについて」というもので、そのときに講師をしてくださった南雲明彦さんが本日は参加してくださっています。

浜田：よかったら、どんな支援方法があるかお伺いできますか。

南雲：先ほど特別支援学級での補助的な指導のお話がありましたが、最近では東京大学先端科学技術研究センターの Do-IT Japan というプロジェクトがあります。これは iPad などの IT 機器を障害のある子たちに貸し出して大学進学を目指していくものですが、年齢的には小学生から対象として支援を受けられます。大分県で取り組みの事例があります。

iPad などは僕のような子にとっては素晴らしいツールですが、それだけではないと思うんです。僕も学校で朝読書がありましたが、その時間は何もできませんでした。学年が低いときはまだいいんですが、学年が上がってくると文字も小さくなるし行間も狭くなってくるし……。書体にも読みやすいものと読みにくいものがあるって、教科書は基本的に教科書体が使われていますが、僕の場合はゴシック体のほうが読みやすいんです。子供のときはそこまでわかりませんでしたけど……。文字や行間や書体が読みづらいからといって、



高学年になって低学年の本を読んでいたら周りから見ると違和感があるでしょうし、先生から見ても「なんでそんな本を読んでいるんだ。この本を読みなさい」ということになるでしょう。ですから、学ぶ上で対等というのを確保するために IT 機器の導入というのも大事なのですが、それだけではないフォローというのがあるので、両面でやっていってほしいと思います。

朝読書をして集中することで 1 時限目も落ち着いて授業を受けられるというのは、僕みたいな子でもあると思うんです。

電子機器だけだと、感覚とか情緒のようなものが育ちにくい側面があります。たとえば匂いでも、紙の匂いですごく安心するようなところもあるでしょうし。そういうものを自分の中で選んでいくことが大事ではないでしょうか。それを支えてもらうことができれば、学校の中でも異端視されずにみんなと一緒に生きていけるのではないかと思います。

浜田：もっと自分に合った文字の大きさやフォントにできれば読みやすくなるのですね。そこは機器を使うことで対応ができる部分ですね。

南雲：そうですね。カスタマイズができるということですよ。そうやって小学校のうちから自分が読みやすいものを見つけていくことも大事だと思いますし、自分を知ることでもあります。また、すべてをバリアフリーで享受することは難しいでしょうから、本を選ぶ上での基準にもなると思います。

マルチメディア DAISY というのがあるのですが、これはすごくいいと思います。ボランティアでやっているものなので冊数は多くありませんが、基本的に教科書はボランティアの方がすべて読んでくれているので、それを自分のペースで聞けるようになっています。人の音声だからいいですね。機械の音声では、子供にとっては味気ないものになってしまうと思うので……。

浜田：ありがとうございます。

寺田：ありがとうございました。

本日の勉強会はこれで終了とさせていただきます。浜田先生、本日はありがとうございました。

次回の勉強会は 9 月 29 日（日）に「矯正教育と読書療法」のテーマで開催します。日本では矯正教育、いわゆる非行少年の立ち直りとかそういうところで読書療法が用いられてきた経緯があります。大神貞男先生という方がやられていたのですが、その方が亡くなられてから引き継ぐ方がいなかったようです。けれど最近は少年院で読書教育に力を入れているところもあると聞きますので、大神先生の時代の読書療法はどういうものであったのかということと、最新の情報を私のほうで事前に取材をしてお伝えする形でご紹介できればと思います。

それでは、また次回一緒にできるのを楽しみにしています。本日はありがとうございました。